

孟夏の太陽

宮城谷昌光

略歴／一九四五（昭和二十）年、蒲郡市に生まれる。早稲田大学文学部英文科卒、出版社勤務を経て現在執筆に専念。九〇年、「天空の舟」（海越出版社）で直木賞候補、九一年同作で新田次郎文学賞受賞。同年、「夏姫春秋」（海越出版社）で直木賞を受賞。作品として他に「王家の風日」（海越出版社）、「俠骨記」（講談社）などがある。

孟夏^{もろか}の太陽

一九九一年九月一日 第一刷

著者 宮城谷昌光^{みやぎたにまさみつ}

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話（〇三）三二六五―一二一一

印刷所 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります

目次

孟夏の太陽	五
月下の彦士	七
老桃残記	一四七
隼の城	二七

あとがき

装
画
坂
本
忠
敬

孟夏の太陽

孟夏の太陽

まるで大樹から天光が発せられているようにみえた。

雪をつけた大樹のむこうから、日が昇ったのであった。

ひとりの背の高い青年がその樹を仰ぎみている。

大樹の翳は、雪の上をながく伸びて、青年を覆い、青年の立っているところから、数十歩はなれたところで薄らいで、雪の色に変わった。

日が昇る直前の雪の美しさはどうであろう。一面に淡い紅が空中から降ってくるようで、日出とともに、大樹の翳が淡紅の色を破って走った。つぎの瞬間、雪は太陽の赤を映したようでありながら、白さを急速に増していった。

青年は吐息をした。息は銀色にかがやいた。

風はない。おだやかな元旦である。

青年の名は、

「盾^{とん}」

という。十九歳である。

かれにとつて、その大樹は、父そのものである。仰げばますます高く、毅然^{きぜん}と天を突いて、しかし孤独であつた。

——わたしは、父を超^こえられるか。

と、みずからに問えば、盾には自信がない。大樹が父であるのなら、自分の身長がその樹以上にならなければ、父を超えたことにならない。とても無理であつた。

盾はふりかえつて樹の翳をみつめた。父の翳でもあつた。盾はおもむろに歩きはじめた。足が雪中に没して、雪が濡^ぬにあたつた。一步、一步が重かつた。やがて樹の先端の淡い翳が、盾の頭の濃い翳とかさなり、つぎに盾の軀^{からだ}の翳が樹の翳より遠くに伸びた。

——なんだ、こんなことであつたのか。

盾は跳びあがりたくなつた。樹の翳は、もはや自分の翳となつた。なお、いまみえる翳は、さきほどまでみえていた樹の翳より長い。

八年間、盾は複雑なおもいで、その樹を仰ぎつづけてきた。樹に近づけば近づくほど、樹は高くなつた。が、遠ざかることによって、その樹を超えたと感じたのは、このときがはじめてであつた。

盾のいる聚落は、いわゆる狐氏の邑である。邑といっても、高い壁でかこまれているわけではなく、深い濠がめぐらされているわけでもない。すなわち狐氏の族は、呂梁山脈（山西省）の東麓で、めだたぬように営為をつづけている。

ところが盾は、狐氏の族人ではない。また父も母も狐氏の人ではない。それでいて、盾が母とともに狐氏の邑で生活しているというこみいった事情を、遺漏なく話すと、こうなる。

盾が生まれるまえの年は周の恵王の二十二年（紀元前六五五年）にあたる。その年ひとりの貴人が、八十人ほどの従者ととともに、狐氏の邑にやってきた。その貴人とは、

「重耳」

である。重耳は晋の国の公子であり、内乱の飛火に追われて、狐氏の邑へ逃避してきたというわけであった。重耳の年齢は、そのとき四十二である。重耳が身の安全をはかるためには、狐氏の邑にくる理由があった。重耳の母は狐氏の出であり、さらに妻も狐氏の血を引いていた。重耳が亡命するにあたって、当然、かの女たちも行動とともにすべきであったが、いずれもすでに死去していた。ただし、重耳の妻の父は健在であった。

「狐偃」

といい、かれは重耳を案内して故地を踏んだ。

狐氏のおもだった族人たちは、狐偃からいきさつを聞き、たちまち重耳に同情した。いや、詳

細を聞くまえに、すでに狐偃の顔をみたときから、かれらは狐偃のあとにつづく集団をいぶかりもせず、歓迎していたのである。

狐偃は話ずきであるから、重耳が亡命せざるをえなくなった顛末を、微に入り細に入り語りはじめると、狐氏の族人のなかには小さな嘆声や笑声をあげる者さえいて、熱心に聞きいったが、その実情は、いかなる声も立てようのないほど陰惨な後継争いであり、重耳はその猖狂をきらつて、亡命してきたというわけであった。

話を聞きおわった狐氏の族人たちは、

「こうなったら、何人たりとも、われらの地へ入れるものではない」

と、狐偃に確約した。が、これはかなりきわどい決定である。というのは、狐氏は重耳を迎え入れたことによって、これまで晋とうまくいっていた関係を捨てたことになり、晋という大国と敵対関係にはいったことになる。晋が本腰を入れて、狐氏の討伐をはじめれば、狐氏はこの世から早晚抹殺されてしまうであろう。

「それでもよいか」

と、狐偃は念を押した。

「よい」

衆口がおなじことばを吐いた。

「もつとも、——」

と、族長は笑い、わが狐氏がこの世から消滅することはあっても、地上から消え失せることはない、と、おもしろい言い方をした。なぜなら、もともと狐氏は狩猟の民族であり、いまは山をなかば降りて、平地近くで、中原の民の暮らしぶりにならって生活しているが、かりに晋の兵に敗れたとしても、もとどおりに山に隠れて棲めばよいだけのことで、晋の兵の放つ矢は、とても山岳の高みまでとどくまい、ということであつた。

「そうまで、いつていただけると、心強い」

狐偃ばかりか重耳までが狐氏の族長に深々と首を垂れた。

狐氏は晋の公子の人柄に好感をいだき、このときから四年後に、晋が重耳を殺す目的で討伐軍を動かしたとき、すばやくそれを察し、狐氏の族人を巧妙に南下させ、狐氏とおなじ白狄の民族の各部族を翕合して、晋軍を黄河の東岸で撃破してしまった。狐氏は約信に一度もそむくことなく、重耳を守り通したということである。

それはさておき、狐氏の邑に着いたばかりの狐偃は、さっそく各戸に挨拶にいったが、この男のぬけめのなさは、このとき主君の重耳の身のまわりの世話をする娘を、物色したことであつた。が、かえってきて慚然とした。

「千羊の皮ばかりで、一狐の腋はおらんわい」

狐偃はわざとつぶやきの声を大きくした。むろん族長にきこえるようにいったのである。腋とは、狐のわきのしたの毛のことで、千の羊の皮をあつめても、その毛の価値におよばないほど、

貴重なものである。つまり狐偃は、主君が気に入るような美女がこの邑にはいないと、不満を口にしたのである。

族長は眉をひそめて、長老のほうに顔をむけ、目でたずねたが、すぐに諒解^{りようかい}して、狐偃を呼んで、

「あなたの婿どのに、馳走しよう」

と、いった。ついでながら、知恵をお借りしたい、ともいった。

族長のいう計画とは、こうである。

前年に、呂梁山脈の西麓に住む赤狄^{せきてき}の一部族である隗氏^{かいし}によって、狐氏は獵場を荒らされた。いつか報復をしなければならぬが、隗氏の本拠を攻めるには、山から雪の消え去ったいまがよく、山の獲物のほかに、隗氏の族長の娘をさらってこようというものであった。

「おい、おい、狐氏にない絶品が、どうして隗氏にあるのだ」

狐偃は族長の手荒な話におどろきつつも、身を乗りだした。

「隗氏の首長の娘の美しさについては、風に馮^{ふう}って、ここまでうわさがとどいています。たぶんお気に召すでしょう。それでだめなら、中原まででかけられて、捜してこられるのですな」

族長は目でかすかに笑ったあと、隗氏を攻伐する謀慮を述べ、狐偃の助言を求めた。狐偃はますます身をかたむけ、

「よし。わしもゆこう。娘の容貌をたしかめる必要がある」

と、いつて、腕をさすった。

山はみどりが盛りで、緑陰の路を、狐氏の兵はひそやかにすすみ、わずかな戦闘を経て、隗氏の本拠に迫ることに成功した。

不意を衝かれた隗氏の族長は、迎撃をあきらめた。かといって、全面降伏をするつもりはなく、防禦の構えだけはとりつつ、

「なにが望みか」

と、配下をつかつて、狐氏の族長に問うた。

「去年、そちらがわれらの獵場とつた禽獸すべてと、そこもとの娘をもらいたい。さすれば、ここで血は一滴も流れずにすむ」

それが答えであつた。隗氏の族長は考え込んだ。白狄と赤狄とは、それぞれに旧怨をもち、二族のあいだにある險悪さは、一朝一夕に氷解するはずがないが、自分の娘が狐氏の族長の妻となれば、いちおう姻戚関係が生ずるので、しばらくはせめぎあいの心配がなくなる。が、それは隗氏の民をたばねる者としての考えであり、娘の父としては、あんな野卑な狐氏に、これまでいくしんできた娘をやるか、と、腹が煮えるおもいもある。

けつきよく隗氏の族長は、狐氏の族長のもとへ、ふたたび人を送って、確約をとることにした。「娘はやる。が、賤妾のごとき扱いであつたら、わしは娘を取り返すほかに、そちらの首まで、もらいうけるからな」

「むげには扱わぬ。山岳の靈に誓つてもよい」

狐氏の族長は、鳥や獸のほかに隗氏の族長の娘をうけとると、兵を引かせた。

「やや、娘は二人ではないか」

狐偃は馬上で手を拍った。

「わが狐氏でも、いまの晋君へ、二人の娘を差し出しましたからな」

中国における貴族の婚儀とは、単数の男にたいして複数の女を必要とする。男は両手に花ということになるが、人には好みがあり、花ならなんでもよいというわけではないのだから、室と室との結びつきを考えると、多数の女を送り出しておくことが安全策であるといえた。当然のことながら、女のほうの好みは無視されている。

隗氏が二女を差し出してきたことについて、狐氏の族長は、あたりまえだという顔つきをした。ちなみに晋室へ嫁入りした狐氏の娘のうち、姉は重耳を生み、妹は夷吾を生んだ。夷吾はこのとき、まだ亡命はせず、屈という食邑にいて、父の晋君と反目していた。

狐偃は馬上の娘たちに近づき、しげしげとながめたあと、族長と馬をならべて、

「山を越えてきたうわきとは、正直なものよ」

と、娘たちの美貌を褒めた。

「けがらわしい巷語とちがつて、木霊を風が運んできたものですからな」

石径にさしかかって、かえって族長の馬は速くなり、やがて緑雲のなかに駆けのぼった。